

『ロシア出張記～ウクライナ侵攻の前後で～』

東海大学東欧会

梅村良恵（2005年度ヨーロッパ文明学科卒業）

私は大学卒業後からロシアとの貿易で生業を立てている。大学卒業の後、専門商社勤務を経て、多くの人々と出会い、多くの人々の支援と協力で、独立を果たし、輸入商社を経営している。その間、さまざまな時代の潮流を私なりに乗り越えながら、日本を拠点に頻りに両国を行き来している。今回、ロシアのウクライナ侵攻を境に前後数か月、私の身の回りで発生した出来事を回想したものが当出張録である。

2021年11月10日 久々の集い

この日、東海大学学科同窓会である東欧会の役員会が東京都内で、開催された。（*1）コロナ禍の中で、久々の会合には倉知会長、大杉副会長をはじめ、東欧会の役員である、航空会社営業マネージャーA氏、一般社団法人東欧支援協会 理事・事務局長の東氏、グローバル物流会社の管理職C氏などが参加した。全体的にロシア事情に明るい方々の出席が多く、時折ロシア語が飛び交う賑やかなものとなった。私は、1週間後にロシア関係での海外渡航を控えており、特に今回は、出席される先輩方から様々なアドバイスをいただきたい思いがあった。それは、通常、ロシア、東欧関係では通常、出張先としては、まず、登場しない行先である、モルディブ共和国へ向かうことになったからである。

航空券はA氏が勤務する航空会社に依頼し、コロナ渦以後、初の海外出張になるもので、正直、不安の中ではあったが、会合に出席の方々は、南アジアの情報にも明るく、非常に心強いアドバイスを頂いた。

2021年11月17日 モルディブ共和国へ

インド洋に浮かぶモルディブ共和国は1200以上ある島からなっている。その中で大きな島の1つであるK島があり、私は、K島で開催されるロシア文化フェスティバルにロシア企業の取引先ということもあり、ロシア企業のゲストとして渡航した。島全体を覆うような大きな5つ星ホテルがその開催会場で、1泊の宿泊料金は一般のロシア人の数ヶ月分の月収に相当する金額であった。出張した時の宿泊客の8割はロシア人が占め、中には、平均滞在期間は2-3か月、半年になる方もおられ、最高の景色と贅沢な食事が用意されていた。長期間の滞在にも飽きが来ないようにホテルは、定期的にロシアや欧州からエンターテインメントのゲストも招いており、宿泊者はリゾートにある宿泊施設でくつろぎながら、ロシア文化フェスティバルのイベントを通じ、ロシア製品や文化・芸術に触れ、イベントを楽しみながら有意義なひとときを過ごしていた。

ホテルの従業員には、現地モルディブ人、ネパール人、バングラデシュ人を中心としたアジア系の他に、ロシア語圏の宿泊客のために旧ソ連地域中央アジアやウクライナやモルドバ出身者が働いていた。イベントにはロシアから舞踊家、演奏家、宝石商、スポーツインストラクターなども招かれた。今回の私の出張目的であるが、仕入れ先であるロシアのマトリョーシカ工場から、ワークショップ（*2）を手伝うスタッフとして招待を受けたものであ

た。ワークショップへの参加者は圧倒的にロシア人の宿泊者、が多かったが、アラブ諸国、欧米からの宿泊者も参加してくれた。

ロシアを代表する伝統工芸品「マトリョーシカ」は一般的に生産の約7～8割は日本向けの出荷だという。マトリョーシカについては、日本では世代を超えた形で、装飾品やインテリアとして販売されることが多いが、ロシア本国では子供の玩具として販売が中心となっている。（*3）私が宿泊したホテルのロビーにもマトリョーシカが展示スペースに置かれており、国籍を問わず子供達に大人気で、常にその周りを子供たちが取り囲んでいた。中には、両親を伴ったウクライナの子供達も通りがかり、その際、両親は微笑みながらも子供の手を取り足早にその場を去って行った光景が今も脳裏に残っている。



《写ロシアを代表する伝統工芸品「マトリョーシカ」

2021年12月17日 突如持ち上がるロシア出張計画

私は、モルディブから帰国後の12月中旬、航空券手配でお世話になった前述のA氏にお礼を兼ねて挨拶に伺った。その際、アエロフロートロシア航空が2022年1月1日以後に2020年以前に獲得した全マイレージをすべて失効させる決定したという、驚きの情報を耳にした。私は、世界的なコロナの不透明が漂う中で、早い時期に状況を見極めるべく、現地の取引先との商談のためロシアへの出張を実施することにした。

久しぶりのロシアへの渡航のため、まずはビザ取得から手続きが始まった。ビザ取得は前述の東氏をお願いをした。早速、仕入れ先のロシア企業に出張スケジュールを伝達し、渡航日程に合わせた形で、国内の移動手段や宿泊先の予約をしていただくことになった。

2022年1月中旬～2月中旬 予期せぬ動き

異変が起きつつあったのは、1月中旬であった。ロシア軍がウクライナ国境に集結している動きから、日本を含め欧米メディアが報道に動き、在ウクライナの各国大使館、外国企業がウクライナのキエフから撤退する動きが出始めていた。日本の外務省はロシアおよびウクライナへの危険情報をレベル3～4に引き上げを発表した。当然、日本国内の取引先からも私の会社に対して、問い合わせが始まり「今後、ロシアとの取引は大丈夫だろうか？」という心配する声も含まれていた。この時、ロシアの取引先からの反応は「西側が単に騒いでいるのね。」という程度で、比較的に日本の各取引先は落ち着いていた。しかし、2月中旬、再び、騒動が起き、米メディアからの情報で「ロシア首都モスクワ襲撃の恐れあり」という報道が駆け巡り、再度、多くの問い合わせをいただくことになった。私は、さすがに焦りを隠すことができず、心配からロシアの仕入れ先に問い合わせをしたが、当のロシア側は「攻撃？誰が？いつ？どこを？何のために？モスクワを攻撃？都市伝説にすぎない。ロシアには外国基地も地震も津波もないから、世界一安全な場所。」という、懸念とは程遠い反応が返ってくる始末であった。

2022年2月24日 全ての終わりと始まり

この日、東京で仕事をしていた私は、仕事を早く切り上げ、ロシア出張に持っていく手土産を買って自宅に帰宅をした。テレビを付けて見たものは、激しい空爆を受けるウクライナの街とロシア軍の戦車の映像だった。「ウクライナとロシアが戦争をする？！何故？」目の前で起こっていることが理解できない状態となり、その場に座り込んでしまった。その夜、ロシアの取引先から急用という電話があった。早速、今回の騒動のことで、渡航中止にした方がよいという話かもしれないと思った。電話口のロシア側の担当者は非常に冷静で「予約した鉄道チケットに入れるパスポート番号の確認をしていただきたい。」という連絡であった。生活は大丈夫だろうか、まもなく開始されるであろう西側諸国からの制裁の影響などを次々ところから伺った。しかし、やはり冷静な様子で

「いや、特に変わったことはない。海外送金？昨日もヨーロッパから入金があったし全然問題ない（＊４）」とだけ回答があり、情報が2～3日遅い印象を私は受け留めた。

この日、日本航空（JAL）は2月24日の午後5時30分の羽田発 モスクワ行き旅客便の欠航と再開未定の判断を下した。私は、この時点でロシアに行かない選択もできたが、到着が遅れ始めている海上運送品の状況やロシア国内の生産基地の生産状況把握及び、今期後半の仕入れ商談、展示会と多くの課題を抱えていた。アエロフロート便の欠航の場合を除いて、出発する方向で出張実施の覚悟を決めた。

2月26日午前8時10分 羽田空港

アエロフロートロシア航空SU261便 モスクワ行きは、定刻通り出発をした。まさに、私はロシアに向かうことになった。

モスクワの空港到着後で驚いたのは入国審査を待つ中国人の長蛇の列に遭遇した。恐らくルーブル暴落による買い物なのか、目的はわからないが、ロシアに中国人が殺到していることだけはわかった。入国審査まで3時間超える前代未聞の混雑の中、入国審査を終えて、目の当たりにしたものは、回収されたと思われるPCR検査証明の紙の山。それを背景に虚ろな目で働く不機嫌そうな空港職員達からは、全く質問もなく、普通にカウンターを通過すると、荷物を受け取り、出口で取引先の担当で、社長夫妻でもある、スベータとパーシャが私を温かく迎えてくれた。

2022年2月26日 首都モスクワから古都ウラジーミルへ

スベータとパーシャはガラス工場を家族で経営し、製品をロシア国内、日本をはじめ世界中に輸出している。彼らの製品は日本では、インテリア雑貨店、家具店などで販売されている。創業は帝政ロシア時代1893年に遡り、ロシア帝国貴族ユスポフ公の所有の工場として始まり、ロシア皇室にクリスタル製品を納品していた。その後、ロシア革命を経てソ連時代には国営企業となり第二次大戦でドイツ軍のモスクワ侵攻により一時休業するが、工員達がパルチザンとして戦い、工場を守ったという波乱の歴史を持つ。戦後は工場のある中心にある巨大な窯の火を1日も絶やすことなく24時間365日稼働しているという。



スベータとパーシャが経営するはガラス工場

モスクワの空港から直接、工場があるロシアの古都ウラジーミルへ向かって、私の乗る車は、走っていった。途中、レストランへ立ち寄り、いつも通り楽しい時間を過ごしたのであったが、時がたつにつれ、会話はやはり戦況の行方ばかり…。その頃、フランス在住のロシアの友人から奇妙なメールが届いた。「今回のロシア滞在は長いのか？今は何もわからない状況かもしれないから、何も考えずに綺麗なロシアの冬景色を楽しんで！次いつ行けるかわからないし…。」後でわかったのだが、実は、この時プーチン大統領が核兵器使用へ言及したと思える報道が大騒ぎになったようだ。この時点で、Facebook等のSNSは不調、一部の外国サイトへのアクセス制限など、徐々に情報の制限が始まったように思えた。

ウラジーミルでの所要を済ませ、ウラジーミル州から夜行列車でニジニブゴロド州へ移動する日の深夜、スベータとパーシャが鉄道駅の列車のプラットフォームまで見送ってくれた。モスクワとニジニブゴロドの間に位置するウラジーミル駅は、主要駅の1つで、駅内には、巨大な跨線橋があり、長い階段（推定3-4階分に相当）を伝い昇り降りする。しかし、駅には、日本と異なりエスカレーターもエレベーターもないため、私の重い2つのスーツケース（推定50kg）は、パーシャが運び、足の悪いスベータもわざわざ、見送りに来てくれた。私は、2人の姿が見えなくなるまで手を振るのであった。

2022年2月28日 マトリョーシカの故郷セミョーフへ

冬のロシアの朝は夜のように暗い。私の乗車するウラジオストック行きの列車はニジニブゴロド州セミョーフ駅に停車した。車両のドアが開くと暗闇の中、昔ながらのロシア帽を被った大柄な男性が出迎えた。マトリョーシカ工場を経営するコロトコフさん（*7）だった。手には花束ではなく、サマゴン（*8）の瓶とショットグラスを持って迎えてくれた。こちらが戸惑っていると「ロシアの挨拶を忘れたか？」と冗談を交えながらのロシアらしい斬新な歓迎にすっかり目を覚ました。

マトリョーシカ生産地として知られるセミョーフ市はモスクワから東北に約500kmに位置し、州都ニジニブゴロドからは72kmほど離れている。あたりは、森林地帯に位置し、地元の豊富に自生している菩提樹や白樺を使用した木工芸品産業が古くから盛んな場所でもあり、日本から夏に観光客が訪れるちょっとした観光地でもある。コロトコフさんのマトリョーシカの工場は、今年、創業90年の老舗工場。この地にマトリョーシカは誕生から今年100周年を迎える。工場の製品（*9）はロシアを象徴する工芸品としてロシア国内では定番のお土産品として観光客に人気で日本をはじめ世界中へ輸出されている。前述で紹介したモルディブのイベントにもこのコロトコフさんの会社から絵付師を派遣したのであった。なお、セミョーフ市はマトリョーシカと同じくロシアを代表する伝統工芸品ホフロマの生産地でもある。



コロトコフさんのマトリョーシカ工場は創業90年を迎える。

セミョーフ駅に到着すると観光バスが4～5台停まっていて、女性と子供とお年寄りが大勢いた。こんな時期にこんな地方都市に観光？あたりは騒然とした光景だった。話によると、ウクライナからの避難民の人々が鉄道でウクライナ東部から州都ニジニブゴロドへ運ばれ、そこから州の各都市、村にバスで移送されるという。セミョーフ市にたどり着いた人々は仮住まいとして駅近くの古い化学工場の寮に住むそうだが、定住希望者のための団地の建設計画などで行政も忙しいらしい。マトリョーシカ工場も就職希望者受け入れの準備をしているが、この騒動で注文は激減し、苦しい経営を余儀なくされていることが、通常の3～5倍に積みあがった倉庫の在庫が物語っていた。マトリョーシカの故郷として知られる平和な町にも戦争の影が差してきた感じであった。

その日、コロトコフ家のリビングではモスクワで開催される展示会について話し合いが行われていた。私のために手配をしたモスクワ市内のホテルについて、今回は中心街付近に滞在したいとの私の我儘から、モスクワのキエフ駅周辺のホテルに予約の取り直しをしていただいた。その晩、私は、コロトコフ夫妻の自家製コニャックでお互いのビジネスの発展と平和を祈願して乾杯し、この日も「いつものロシアの日常」を終えた。

3月1日 モスクワへ向かう

セミョーフを後にし、モスクワへ向かうため、州都ニジニブゴロドへ移動した。移動中の車でメッセージと着信に気が付いた。ビザを手配して下さった東氏からであった。「間もなくアエロフロートが飛ばなくなるかもしれない、帰国のことを考えた方が良くもしいない」と心配されている様子だった。この時、既に欧州はロシアの航空機が乗り入れ禁止になっていた。帰国を心配する私をよそに、ロシア国内のロシア人の知人友人は、我々外国人とは、かなり温度差のある様子で、次のような意見を述べていた。一部を紹介する。

「ロシア発着の飛行機停止は過去60-70年代くらいにもあった、そのときは西側都合で3週間程度で元に戻った。今回は長いかもしれないが多分大丈夫」

「国難は初めてのことじゃない、配給制もあった、ペレストロイカ、ソ連崩壊、金融危機もあった。生活の質はと

もかく生き延びたので大丈夫」

「全部の経済が封鎖された場合、国民 1 人につき、ダーチャ (別荘) もある。畑で野菜を栽培し豚や鳥を飼って生きるのも問題ない」

前代未聞の経済制裁下、全ての人が同じ意見ではないものの、ロシア人の人生観や世界観の一部を垣間見たようだった。便利で快適な暮らしに重点を置く、われわれとは、異なる価値観をこの時、大いに感じたのであった。

さて、モスクワへの移動はサマラからモスクワ間を結ぶトランジット列車を利用した。ニジニノブゴロドに着いたときには既に多くの乗客が乗っていた。食堂車で食事をしていると、どのテーブルも戦況の話で持ち切り状態。泣きながら食事をする人々も目にした。モスクワに到着すると、号泣し車両を降りて出迎え人に抱えられる女性たちの姿を多く見かけた。誰か亡くなったのだろうか、出迎え人の手には赤いカーネーション が握られていた。他にもモスクワの街を行き交う中で、無言で涙を流しながら歩く人をよく目撃した。悲しいことがあったのだろうか…偶然にしてもよく目についた。

場所をモスクワに移し、私は、早朝にモスクワ郊外や市内の仕事の関係先へ出かけ、午後に展示会場に出向き、マトリョーシカ工場の展示会の手伝いに廻った。展示会は戦時下とは思えないほど賑わいを見せ、多くの外国人の姿もあった。

3月3日 銀行倒産騒動

この日、日本の貿易商社のモスクワ事務所に挨拶へ向かった。元同僚と元上司と社食を頂きながら、今後困難に見舞われそうなロシアとのビジネスの未来と現状を話すことになった。困難な状況にいるのは私だけではないという安心感が湧いてきた。その後、ロシア在住の友人から連絡があり、私が口座を持つティンコフ銀行が倒産の恐れがあるとの情報で、ATM で現金をすぐ引き出した方がいいという、連絡だった。しかし、既に ATM の現金は外貨もルーブルも引き出せない状態であった。

3月5日 ロシア脱出準備

「3月8日を最後にロシアから外国に出国できなくなる、アエロフロートは既にモスクワ - ミンスク便を除く、すべての国際線を停止している。」という情報が前述した日系商社のモスクワ事務所に勤務する元同僚から届いた。事実関係を確認するために、アエロフロートに電話をするも全く繋がらない。仕方なく、自分で情報を収集すべく航空券予約サイトで調べることにしたところ、全ての予約サイトで「ロシアの空港の全て」が排除されていて、どこに、いつ、どの航空会社が就航しているのか全く分からない状態になっていた。そのためロシアを就航しているであろう各航空会社を予測し、それぞれの会社のサイトに入り、調べなければならなかった。購入したい航空券があっても、この混乱でモスクワ発の航空券価格は何倍にも跳ね上がり、為替レートの混乱も相まって、数分ごとに価格は変動していた。本来、クレジットカードで決済するところだが、一般的なカードの限度額を超える航空券が多く、限度内であったとしても外国発行のカードが使えないことも発生し、最終的に知人の紹介で飛び込んだ中東のカタール航空の事務所で、手持ちの現金とカードを合わせて、何とか購入することができた。

私は当初、3月7日からはサンクトペテルブルクへ出張する予定を組んでいたが、一連の激変する状況から、キャンセルを決め、モスクワ脱出までの宿泊場所を押さえるため、ホテルのフロントへ相談しに行った。その時、ロシアの宿泊施設は、既にグローバルホテル予約システムサイトからも排除されたことを知った。私は、ホテル側から、滞在延長は毎朝 10 時



モスクワ発の航空券価格は数分ごとに大きく変動していた。

までにフロントに来て、支払をするよう指示を受け、料金は毎日変わるので注意するようにと説明を受けた。数日前は、どこでもスマホやパソコンで比較検討し予約できたのに、「いつものロシアの日常」は瞬く間に変わっていった。私は、今、激動の中にいることを理解した。

3月8日 モスクワ最後の日

その日、出発前に空港の近くに教会で車を止めた。中ではミサの最中だった。長旅になるので見送ってくれたスベータとパーシャが、私の安全な帰国のために教会に祈祷を頼んでくれた。教会の中には売店があり、私は、友人からアイコンのお土産を頼まれていたことを思い出し、売店に立ち寄った。店番の店員の目には涙が浮かんでいるのを知った。客の私の存在に気が付くと、「ハリコフにいる父と連絡が取れなくて…毎日空爆が続いているのに、足が悪い父は避難できないから心配でたまらない。」という話をしてくれた。家族や親戚もロシア語を話す家庭で育ったという。男性の故郷ハリコフに住む親戚、友達は今ロシアについて何を思っているのだろうか…。男性店員がこう続けた、「ロシア語を話しているも、そこに住む人々にとってはウクライナが故郷なのです…。」その言葉だけで、私は、彼の気持ちを十分理解できた。私は、お土産を丁寧に梱包してもらい、お礼を言うと、もう一度、ミサが行われている聖堂に戻りウクライナとロシアの人々に再び平和な日常が訪れることを祈って教会をあとにした。

5月中旬 東京にて

この騒動から、2ヵ月と少しが過ぎた頃、ウクライナ侵攻後のロシアから最初の貨物が到着した。侵攻後に輸送する方法もなく、暫く何もできない状況が続いたが、4月初旬、徐々に一部の航空会社が就航し始めた（未だ東京 - モスクワ間の直行便は運休している）。輸送費は数倍に跳ね上がり、貨物も旅客便と同じような混乱が見られた。この仕事をしていて貨物の到着をこれほど喜んだときはない。また、輸入通関には先述の東欧会のC氏の多大なご尽力を頂いた。

残念ながら、今回の騒動では、当初、受注先からのキャンセルやロシアとの取引関係から、一部ではあるが、心無い誹謗中傷を受けることもあったが、貨物の到着を待っていただいた大半の日本の取引先には、とても感謝している。多大な影響を受けながらも、悪いことばかりは続かないと信じて、私の気持ちは前を向いている。

そして、つい先日、ウクライナからボロボロの荷物が届いた。その状態からいかに険しい道中だったかを物語っていた。騒動直後に世界的にロシア製品排斥の動きが広まる中、ある企業から「お店で取り扱っているロシア製品の隣にウクライナ製品と一緒に並べて両国の平和を願うコーナーを作りたい」という依頼があり、手配をした第一便がようやく到着したのだ。この1年、両国のことを考えない日はない。1日も早い停戦を祈念すると共に、ウクライナとロシア両国に平和な日常が戻ることを願って、届いたウクライナ製品を販売先へ、送り出したのであった。

-
- (※ 1) 一部の東欧会役員のみでコロナ渦ということもあり小規模で行った。
 - (※ 2) 日本でも開催されたマトリョーシカ製作を現地の絵付師から直接指導を受けることができるワークショップ。マトリョーシカ工場で使用されているほぼ同じ道具、材料で製作を行う。
 - (※ 3) ロシアでの需要は一般客は子供や孫のおもちゃとして、外国と仕事に従事する人が家庭で飾ったり土産に購入する。最大の販売先は外国人観光客のお土産店などだが、現在は新型コロナウイルスの影響と戦争の影響でこの産業は危機に瀕している。
 - (※ 4) この後、1週間と経たずに欧州からの国際送金は途絶えることになる。
 - (※ 5) 私よりも年上の年配の夫婦なので本来では父称を付けて呼ぶのが正しいが欧米風にカジュアルに呼ばれることを好んでこのように呼んでいる
 - (※ 6) 主要 SNS、通信アプリが使用できない中、テレグラムだけは常に使用できた。
 - (※ 7) 日本風の呼び方が気に入っている
 - (※ 8) 家庭で手作りされる密造酒。残ったジャムやパンなどの炭水化物から作られる
 - (※ 9) 黄色頭巾と赤いサラファンにブーケを持った女の子のデザインのマトリョーシカ。他にもセミョーノフ マトリョーシカなどとも呼ばれている。
 - (※ 10) ロシアでは赤いカーネーションは亡くなった方に捧げられることが多い
 - (※ 11) 新興財閥オレグ・ティンコフ氏が SNS 上で反戦発言をし銀行の倒産が決定されたという騒ぎがあった
-